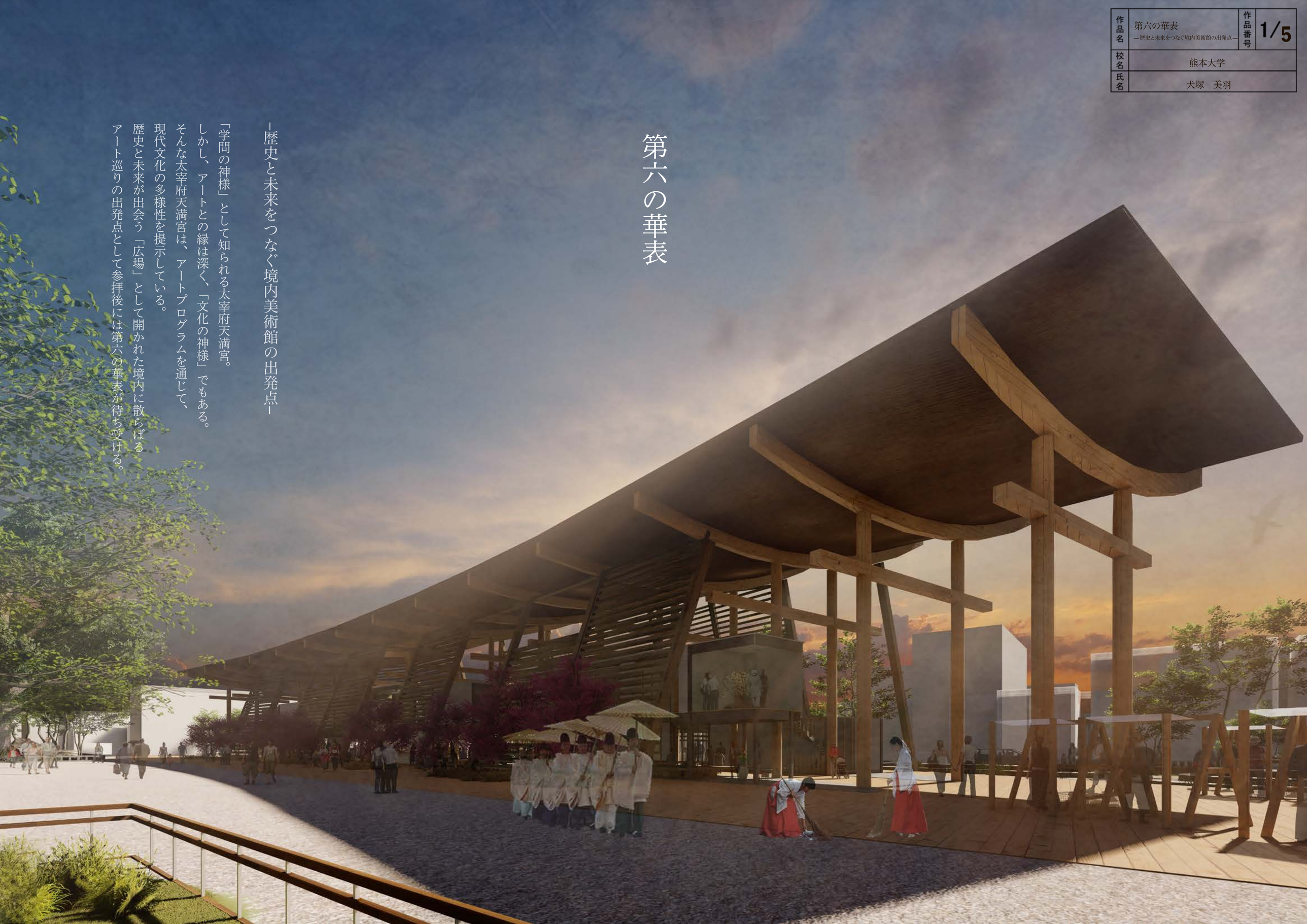
作品名	第六の華表 —歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点—	作品番号	1/5
校名	熊本大学		
氏名	犬塚　美羽		

第六の華表

—歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点—

「学問の神様」として知られる太宰府天満宮。
しかし、アートとの縁は深く、「文化の神様」でもある。
そんな太宰府天満宮は、アートプログラムを通じて、
現代文化の多様性を提示している。
歴史と未来が出会う「広場」として開かれた境内に散らばる
アート巡りの出発点として参拝後には第六の華表が待ち受ける。



作品名	第六の華表 ―歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点―	作品番号	2/5
校名	熊本大学		
氏名	犬塚　美羽		

01 対象敷地　福岡県太宰府市宰府

福岡県太宰府市宰府にある「太宰府天満宮」の境内に位置する。現在社務所が立地しており、小道を挟んで反対側には太宰府天満宮の祭事等が行われる広場が位置する。参拝客が参拝を終え、参道に戻る路に接続しており、太宰府天満宮に訪れる人の帰り道となる場所であり、太宰府天満宮の行事等に参加する太宰府市民にとっても馴染みのある場所である。
しかし、既存の社務所は境内や住宅側の道路にも開かれておらず、また災害や長い年月による老朽化が進んでいる。

現在の境内に閉じた社務所

02 太宰府天満宮 × アート

太宰府天満宮は、「学問・至誠・厄除けの神様」として菅原道真が祀られている神社であり、年間に約 1000 万人の参拝者が訪れている。
そんな太宰府天満宮は、「学問の神様」の印象が強く持たれているが、「文芸・芸能・芸術の神様」としても古くから崇められている。
「神社」と「アート」は一見関わりないように見えるが、天神さまの元には、御奉納を通じて時代の最先端の文化・アートが集まり、此処から郊外的に広く発信なされてきた。

御奉納された昔の書や絵画が展示された休憩所

幼稚園生が境内でアート体験

03 太宰府天満宮アートプログラム –境内美術館–

境内美術館
KEIDAI ART MUSEUM

境内に散らばるアート作品

太宰府天満宮が文化・アートの擁護者としての天神さまの役割を現代に継承し世間に伝えるべくスタートしたプロジェクトが、国籍やジャンルを超えた現代アートを提示する「太宰府天満宮アートプログラム」である。このプロジェクトでは境内に現代アートを散らばせ配置し、境内を美術館化させている。アートを番号順に回ることで境内を回遊することができる。

04 背景

・アーティストの取材や滞在から生まれるアート　（アートプログラム × アーティスト）

このプロジェクトで呈示されるアートは、神社や神道を理解し感じた上で出来上がる作品が展示されている。そのため、アーティストは実際に太宰府天満宮を訪れて、取材や滞在から作品を生み出している。しかし、境内に作品を提示するスペースはあるが、アトリエのようなアーティストのための居場所は存在しない。

・「学芸員」= 神主　（神職さん × アーティスト）

このプログラムの特徴として、本来の美術館であれば「学芸員」が行う内容を神道をより理解している神主が行っていることである。
アーティストの誘致や作品の方向性、制作に必要なものなどを決めるため、神職のアートへの理解がより求められる。

・通過型・立ち寄り型観光の課題　（観光客 × 市民 × アート）

太宰府観光業における課題として、滞在時間が短く、通過型・立ち寄り型観光の定着が挙げられる。また、このプログラムは作品が境内に分散しているため、認知度が低く境内アートを回遊するきっかけを与える必要がある。

華表（＝鳥居）を通り抜ける

太鼓橋から池と共に見る

住宅・駐車場（西）側と境内を繋ぐ

太宰府の花「梅の木」が広場と建物の境界を滲ませ、境内に馴染む

作品名	第六の華表 ―歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点―	作品番号	3/5
校名	熊本大学		
氏名	犬塚　美羽		

05 提案　歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点

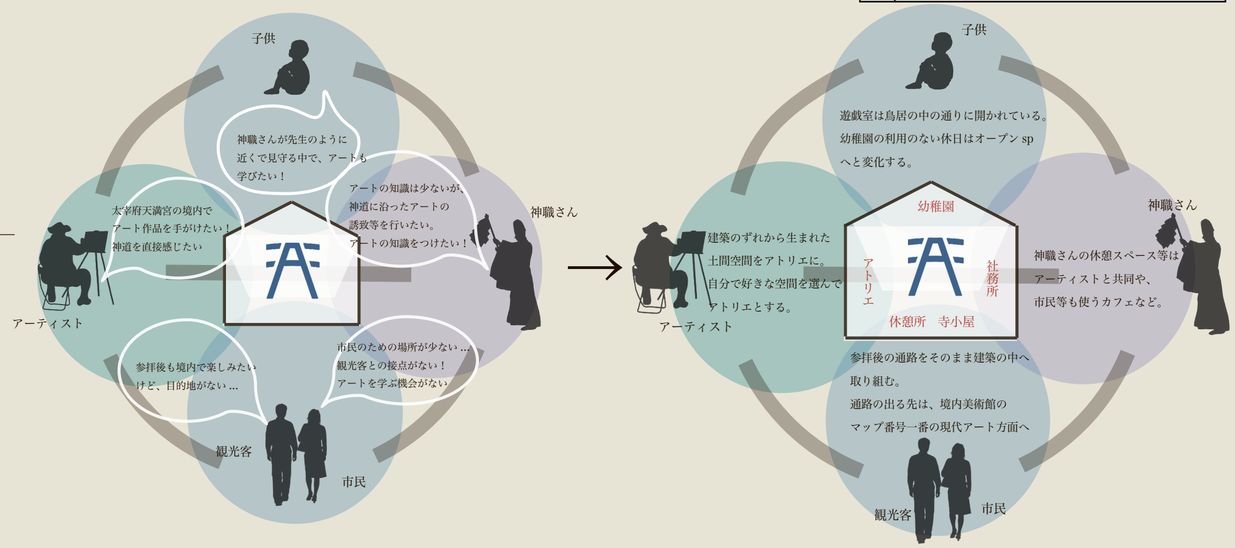
“ 社務所 × アトリエ × 幼稚園 ”

そして、神道と現代アートにふれ、一つめの境内美術館のアートへと向かう。

日常で「神道」に触れる機会は少ない。
そこで社務所を境内に開き、日々神様に御奉仕する神職さんと市民や観光客の距離を近くすることで、改めて「神道」と触れ合う機会を生みだす。

アートプロジェクトの神道に関わる作品の制作を、より太宰府天満宮に近い境内で行う。
アートが生まれる工程や考えを共有し、歴史と現代、未来の関わりを探す。

歴史を感じる太宰府天満宮と現代の多様性が表現される現代アートのそばで、未来を担う子どもの教育を行う。
様々な考えやアートに触れる機会をもたらす。

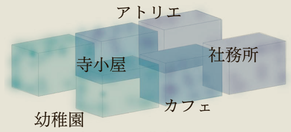


06 ダイアグラム

a. 華表 (= 鳥居) が人間と神様の世界をつなぐように機能をつなぐ

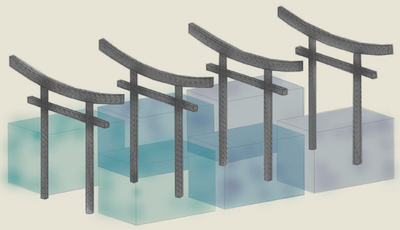
華表 (= 鳥居)：人間世界と神様の世界の境界であり、つなぐもの

＋



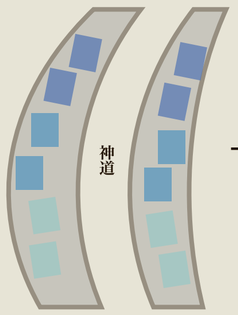
太宰府天満宮におけるアートに関わりのある機能

→



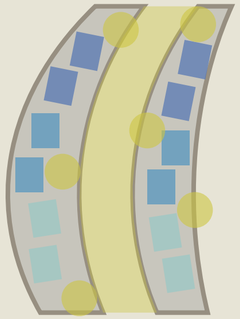
鳥居をかけて、用途同士をつなぐ

b. 神道とアトリエが境界を滲ませる



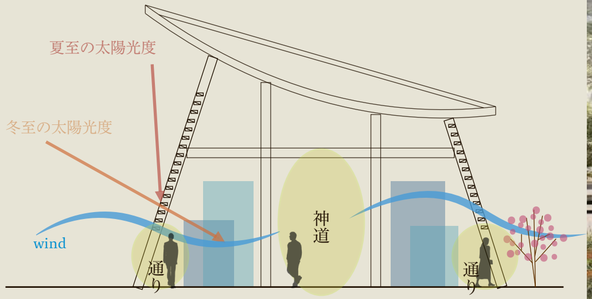
建物のずれから生まれる土間空間

→



土間をアトリエに
機能毎の境界にアートを挟む

c. 鎧格子が生む風と光と二つの通り



鎧格子が東西に延びる建築を日光から守る

作品名	第六の華表 ー歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点ー	作品番号	4/5
校名	熊本大学		
氏名	犬塚　美羽		

07　参拝後から境内美術館までのシークエンス

五つの華表（＝鳥居）を抜けて、本殿参拝後に待ち受ける第六の華表。鳥居をくぐるように進むと、様々な神道に関わる機能とアトリエが現れ、神道とアートに触れさせることで境内美術館のアート作品へ導く。

b. 神道に開かれる社務所の書道室
本来社務所に閉ざされた空間として存在する書道室を市民や観光客に開くことで神道と触れ合う機会を生み出す。
また、現代アートと歴史のある書道をつなげることで、「芸術」の流れを感じさせる。

e. 広場とつながるオープンスペース
広場と鳥居の神道をつなぐカフェは、東に開いた場所にも休憩スペースを設け、広場と一体的な利用も可能となる。

i. 太宰府天満宮とアートを共に見る
境内アートは地上で作品が見れるが、このギャラリでは上階からの太宰府天満宮の景色と現代アートを共に見ることができる。

c. 境内に開かれる会議室
普段は社務所の会議室として利用され、学芸員育成等の場としても利用される。
東側の広場で祭事等が行われるときは、休憩スペースや医務室等としても離島が可能である。

f. カフェからアートと太宰府天満宮を見る
東側向きにカフェに腰をかけると、太宰府天満宮が姿を表し、神道の方にはアートが広がる。太宰府天満宮の花である梅の木の風景とともに休憩する。

k. 神道にはみ出すバザー
幼稚園で行われるバザー等の行事は開かれた遊戯室と神道によって観光客や市民、アーティストを巻き込む。そして、境内は園児たちの園庭のように広がっていく。

太宰府天満宮
本殿

境内・広場 (東) 側

神道

住宅・駐車場 (西) 側

境内美術館
アート作品

d. 神職さんの休憩スペースから見えるアート
神職さんにもアートの知識が求められるアートプログラムであるため、神職さんとアートの距離を近くにする。
アトリエを風景化することでアート作成の流れも見ることが可能となる。

g. 神道でワークショップ
大きな通りとなる神道では様々なアートにまつわるワークショップ等が行われる。
そのような活動を通して、南北に繋がる異なる機能がアートによって結ばれる。

a. 光明禅寺の庭園をイメージした広場
入り口付近の広いスペースではフリーマーケットや蚤の市等の市民の主体となったイベントスペースとなる。市民と参拝を終えた観光客のつながる場となる。

l. 太宰府の山の中を自由に遊べる園庭
太宰府天満宮を囲む二つの山、「宝満山」「四王寺山」をモチーフに、山を駆け回るように園児が遊ぶ。

h. 自由自在なホール
アートプロジェクトの一貫のトークショーや舞台などがホールスペースで行われる。壁を設けず、カーテンによって空間を区切ることで、神道にはみ出すようにスペースを利用したり、空間を小さくして市民のための寺小屋（学習スペース）や、レンタルスペースとして利用できる。

j. 幼稚園にアトリエが滲む
幼稚園の中の土間空間はアーティストのアトリエとなり、アーティストは子供たちの声や姿、子供たちはアートに影響を受けあう。
神道にまつわるアートと子供たちの距離は縮まる。

作品名	第六の華表 ―歴史と未来をつなぐ境内美術館の出発点―	作品番号	5/5
校名	熊本大学		
氏名	犬塚　美羽		

1階平面図兼配置図　S=1:400

2階平面図　S=1:400

B-B’ 断面図　S=1:400

A-A’ 断面図　S=1:400